大学院同窓会からのお知らせ

JUEN 12
Joetsu University of Education, Network

千葉 山屋敷の会

会長　松戸市教育委員会生涯学習本部
指導課　課長　池田　稔
（昭和62年3月教育基礎コース修了）

上越教育大学大学院同窓会千葉県支部（「千葉　山屋敷の会」）は、上越教育大学と大学院修了生が交流を深めることにより、情報交換と親睦を深める活動の中で、相互の研鑽と資質向上に役立てていくことを目的として、平成18年1月28日に設立されました。

設立総会では、全ての院生が何らかの形でご指導していただいた高田喜久司先生をお招きして、「『人間力』の育成と教師のあり方」という演題でご講演をいただきました。上越教育大学の現在の様子を交えてのお話に、日常の教育実践への大きなご示唆をいただくとともに、「上越の風」を感じて研究に没頭した日々を思い出しました。また、第2回「千葉　山屋敷の会」では、本県の公立学校教員から大学院派遣を経て大学教授となられた、柳生和男先生をお招きして、ご講演をいただきました。本県の教育現場の実情を踏まえての児童生徒の問題行動やその対応についての最前線の現状についてのお話に、翌日からの実践への勇気と活力を得た気がしました。どちらの会でも、講演会終了後講師の先生を交えての和やかな懇親会が催され、専攻や修了年度の違いを超えた交流が行われました。

設立総会（於：三井ガーデンホテル柏　H18.1.28）

このように、会員同士が和やかな中に研究や現場での実践に対する意欲を高め、成果を挙げるきっかけとなるような会を立ち上げることができました。しかし、本県の現職教員の新たな派遣事業の大幅な縮小による新規会員の減少や、人事異動に伴う職場環境の変化による事務局役員の職務執行の困難化等が原因となって、本会の運営が硬直化してしまいました。このため、59名（H19・1・27現在）の会員の皆様がいらっしゃるにも関わらず、平成20年度以降本会が開催できない状態となっていることが痛恨の極みです。

現在の役員は、第2回総会で選出された、会長：池田稔（S61教育基礎）副会長：立林尚也（H4教育方法）・松田素行（S59生徒指導）・田中清（S60生徒指導）事務局：平松澄明（H8教育方法）会計：吉田隆（H13発達臨床）が暫定的に会の運営を管理している状況です。（※（　）内は修了年度及びコース）

本県下には、現職派遣及び学部卒の100名を超える上越教育大学大学院修了者が在住・在勤しておられると聞いています。来年度は設立5年目を迎えますので、再び会員の皆様に活力と交流の輪を広げられるような活動ができるよう準備を整えております。

第2回「千葉　山屋敷の会」（於：ザ・クレストホテル柏　H.19.1.27）

大学院同窓会への問い合わせ先
大学院同窓会事務局長
中村　雅彦
（自然・生活教育学系　教授）
E-mail：masahiko@juen.ac.jp

修了生からのお便り

地域に根ざした教育活動の推進

プロフィール
秋山　正道（あきやま・まさみち）
昭和63年上越教育大学大学院生徒指導コースを修了（4期生）。主として上越地域の小中学校を歴任し、現在は妙高市立新井中学校に勤務。自宅近くの黒井駅から新井駅まで車窓から見える妙高山系の山並みの変化を楽しみながら電車通勤中。

農家を訪問し水との関わりについて話しを聞く

中学生の放課後は忙しい。部活動の厳しい練習に汗を流す。練習試合や冠大会も多くなってきて、休日なのになかなか休んでいられない。中学校体育連盟の大会になると、大勢のお父さんやお母さん、あるいはおじいさんやおばあさんなどがギャラリーとして会場は満席になる。大人の期待も一身に受けてがんばる中学生。地域のスポーツクラブにも所属しているために、休日には一人で二役も三役も掛け持ちしている中学生もいる。また、学習塾やピアノ、英会話といった習い事にいそしんでいる中学生も多い。こんな毎日を過ごしている中学生に道草などしている暇はない。目を上げて周りの景色などを眺めるゆとりもない。だからかどうか、新井中学校に着任した直後にどれが妙高山かをさせる生徒がほとんどいないことが分かって愕然とした。新井中学校の校歌は上越出身の芥川賞受賞作家、小田嶽夫の作詞になる格調高い校歌だが、この実態を知れば、天国の小田先生もさぞやがっかりされるだろう。

そういえば、どこへ行っても夏休みの朝には決まってラジオ体操をしていたものだが、近ごろは公園へ行っても中学生がラジオ体操をしている姿を見かけない。中学生の参加が少ないので、子ども会から中学生を外すことにしたという話をきいたのは20年くらい前だったろうか。少子化のためもあるが、地域からどんどん中学生の姿が見えなくなっている。

こんなことでいいのだろうか、と思っていたら最近うれしい話を聞くようになった。それは、中学校でキャリア教育が導入され、職場体験学習が盛んになってきたことである。上越市内の中学校では生徒はすべて1週間の職場体験をする。当校でも2日間だが、中学2年生を対象に毎年実施している。この機会を通して、中学生は地域の会社等で地域の人たちからいろいろなことを教えてもらったり、自ら働いたりして多くのことを学ぶ。

私自身は、この他に各教科の学習で地域を知り、地域に学ぶ学習が必要に思う。地域の自然や文化あるいは産業といったことに中学生として関心を抱き、様々なかかわりを通して理解を深めることが地域を大切にし、地域を愛する心を育成することにつながると考えるからである。

新井中学校では今年度、水を主題にした学習を3年生の選択教科（社会科）で実践している。妙高市は上越地域の中でもとりわけ雪が深い。スキーも地域の大事な産業である。また、雪融け水を利用した農業や酒造り、あるいは温泉というように水は地域の産業や生活に欠かすことのできないものである。しかし、かつては有毒な工場排水が関川に流されて大きな問題となった歴史をもっている。そこで、同じ新潟県で発生した新潟水俣病問題を取り上げて、水が汚染されたときにどのような問題が生じるか、現地学習もふくめた環境学習を進めている。生徒は夏休み中に浄水場や酒造会社あるいは温泉旅館や化学工場等を訪問し、施設等を見学したり、説明を聞いたりして水とのかかわりについて具体的に考える機会をもった。現在、卒業を前にして環境を守るために自分たちで実践することや大人への提言をまとめている。また、秋には3年生全員で阿賀野川河口から上流の昭和電工鹿瀬工場まで視察し、有機水銀中毒がいかに深刻な問題であるかを実感した。

だんだん教職人生の終わりに近づいてきたが、最後まで「地域の子どもは地域に」をモットーに教育実践を積み重ねていきたい。

雨の降る中、有機水銀がこの排水口から阿賀野川へ流れ出て新潟水俣病が発生したことを学ぶ